

# 再び人権と報道の議論を

鹿児島県警本部長の犯人隠匿を内部告発した県警の前身治安部長はキシャクラブメディアではなく札幌の雑誌記者にリークした。沖縄県警などが県警クラブで広報しない米兵による強かん事件は半年以上も隠蔽された。キシャクラブメディアの記者が権力を監視しているというはまったくの虚偽だ。

現在の日本には「報道の自由」があるのに、権力監視機能をもたえず、自ら進んで「大本営発表」報道、翼賛・産業報国的な活動を行っているという意味で、戦前・戦中のメディアより悪質だと言える。

## 挟み撃ち

メディアは、権力と市民の挟み撃ちに遭っている。これを打開するには、権力には厳しく、市民に優しい「ジャーナリズム」を創生するしかない。ジャーナリズムを創成し、メディア労働者の人権を守るため、欧州などで実践されている匿名報道主義を導入し、取材と報道についての行動指針を策定し、そのガイドラインを順守しているかどうかの審判を下す仕組みをつくるしかない。再び、人権と報道の議論が起きることを期待したい。

## 人報連50年担った映画監督山際永三さん逝く

いつかこういう時が来るとは覚悟していたが、残念な知らせだった。私が代表世話人を務める「人権と報道・連絡会」(人報連、一九八五年七月設立)会員の岩崎風水氏から、昨年十一月一日、山際永三さんが亡くなったという連絡があった。

九二歳、老衰での死去だった。山際さんにはできるだけ長生きして、山際さんしかできない文化論、実存哲学を軸にしたマスメディア改革運動と冤罪者の救援活動を続けてほしいと願っていたので、早過ぎる死だと思った。一二月三日に通夜、四日に告別式があった。山際さんは

今も石破政権と自民が支持され、第二自民党を自称する維新が勢力を増す政治状況が生まれたのは、行政権力を監視すべきジャーナリズム(報道)とアカデミズム(大学)が全く機能せず、権力の補完勢

## 人報連再起動の機会に

### 山下幸夫弁護士

浅野健一さんの「犯罪報道の犯罪」は衝撃的で、それまで持っていた報道についての疑問点が、匿名報道主義の導入で解消できると感じました。この間、メディアは、呼び捨て呼称を止めるとか、いくつか変わったところもありましたが、常に大きな事件が起きるたびに悪い方向に戻るということが繰り返されてきました。キシャクラブを通じて警察発表の受け入れとマスコミによる実名報道を変えなければならぬ。私たち市民が声を上げ、改善を求め続け

力となっていてからだ。権力に抗うべき労働組合、労働団体の多くも本来の機能を果たしていない。マスメディアが権力監視を怠り、ロシア・ウクライナ戦争に乗じて、民衆に「次は東アジア

## 無罪を報道しない公安報道

### QRC山中幸男さん

土田・日石・ピース缶爆弾事件では全員、無罪の結論を得た。しかしその中で検事として大量の虚偽の自白調書を作り、最大の責任者であった神崎武法氏(後の公明党代表)が、責任を取ったとか、報道で弾劾されたとかということはない。無罪判決後も一切ない。革労協の「ゲリラ事件」で2014年に逮捕された元活動家は長年の裁判で無罪を確定さ

だ。「日本は明日のウクライナ」と煽り、戦争に起因するエネルギー不足を叫んで、軍国主義化、新・原発神話を民衆に刷り込んできた。メディアの大本営発表報道復活は万死に値する。(レジュメより抜粋)

## 角川人質司法とメディア

### 支援者・伊達百合さん

「東京五輪汚職」で角川歴彦さんは、無罪を主張したために226日間、身柄拘束され、2024年6月、角川人質司法違反訴訟を起こしました。取り調べの過程で、報道が出る前なのに、角川さんの家の前にメディアの人がいっぱい来ました。検事は「上の方がリークした」と言いました。その後、報道され、集まった報道陣の代表質問を受けたら検事に「あんなことしちゃだめ

だ」と言われ、翌週、角川さんは逮捕されました。代表質問を受けて自分が無実であると語ったから罪証隠滅の恐れがあるということでした。これがメディアと権力の実態なんだと分かりました。

## 田中正道さん

昨年、つばさの党の黒川敦彦代表ら3人が、公職選挙法違反容疑で逮捕されました。小池・東京都知事の街頭演説を妨害したというのですが、同じ候補者同士の言い争いなのに片方だけが逮捕された事件で、無罪を主張しています。注目してください。

## 大坂正明さんは無実だ

星野大坂 全国救援会 杉浦文俊さん 1971年11月の「渋谷暴動闘争」で星野文昭と大坂正明さんは殺人罪をでっち上げられました。星野さんは2019年に医療刑務所で亡くなりました。国家によって殺されたのです。大坂さんは、まったく見ず知らずの学生の目撃供述によってでっち上げられました。今も獄中で無実を訴え闘っている大坂さんを何としても取り戻したい。

## 月二日付、A4判・九枚)の一部を読み上げた。

「人報連の三十数年については、一切後悔はしていない。むしろ一口で言えば『権力対民衆』という二者択一の発想の貧しさをいよいよ痛感しながら、権力と民衆のあいだにバリアを張り巡らせているマスメディアの存在の圧倒的な大きさに、私自身がたじろく。権力論を伴わない運動論は信用できないという考え方から、実践的思想こそ大切だと考えてきたし、それは変わらない」

私が山際さんに初めて会ったのは、一九七四年末、冤罪「松戸OL殺人」事件で逮捕された小野悦男さんの取材だった。共同通信の入社三年目の

## 私に、小野さんは無実ではな

いかと訴えた。山際さんは小野さん救援会を立ち上げ、救援連絡センターが公安労働・政治事件だけでなく、一般刑事事件の被疑者・被告人の支援に取り組み契機になった。

山際さんと出会ったことで、私の人生が変わった。山際さんが創った小野さんの著書『でっち上げ 首都圏連続女性殺人事件』(社会評論社、七六年)に筆名「中島俊」で論稿を書いた時、長い文章の書き方を教えてくれた。

慶應義塾の先輩でもあった山際さんは私の活動を認め、五〇年間もの間、たくさん教えてもらい、励まされた。私を大事にしてくれ、人としての生き方を示してくれた。山

次回定例会は  
調整中